

待降節第四主日

2011.12.18

ルカ 1・26-38

待降節も第四主日です。あと一週間で今年もクリスマスを迎えます。クリスマスをまじかに控えた今の私たちの心のうちには、どのような想いがよぎっているでしょうか。

被災地の方々への想いは、今も私たちの心から消えることはありません。何時、どのようにして収束に向うのか、本当のところは誰にも分からない放射能汚染への恐怖は、私たちの心を重く押しつぶしています。グローバル化に向けて突き進む世界経済の動向が、私たちの生活を根底から脅かしています。

このような状況の中であって、今の日本の社会の中に生きる多くの人々は、かつてのように、クリスマスを、歳末を彩るエキゾチックな風物詩として楽しむことは出来なくなっています。バブルの頃の街を彩った華やかなクリスマスへの一抹の郷愁を残しつつも、クリスマスのムードそのものが今の日本の社会から失われつつあるようにも思えます。

けれども、このような時代を生きるカトリック信者である私たちにとって、それは必ずしも悲しむべきことではありません。クリスマスは、この私たちの世界を覆う暗い現実の中に、神がもたらされる希望の光の見つめることを私たちに求めていることを、私たちは知っているからです。クリスマスは、私たちをそのおとぎ話のような世界に誘って、つらい現実の中で一時の安らぎを味あわせようとしているではありません。むしろ、今年も私たちが祝うクリスマスは、神が与えてくださった希望の光を思い起こすことを、私たちに求めているのです。その希望の光に導かれて、私たちの社会を覆う暗い不安の中から立ち上がって歩み続けることを、私たちに求めているのです。今年もクリスマスを迎えて、私たちがその誕生を祝う私たちの主イエス・キリストは、あの時代のユダヤの社会の現実の中にお生まれになったように、この時代を生きる私たちの中に、私たちの歩みを導くために、私たちとともにいてくださるのです。ここに、クリスマスが今年も私たちの心の中に灯す希望の光の源があるのです。

今日待降節第四主日の福音は、お告げの場面です。ナザレのおとめマリアのもとに、天使ガブリエルがもたらした神からのお告げによって、クリスマスは私たちの世界にもたらされたのです。

旧約のイスラエルの民の歴史を通して、神が長い長い時をかけて構想を暖めておられたクリスマスの出来事は、天使ガブリエルによって救い主の母となるべきナザレの乙女マリアに示されたのです。天使ガブリエルは、聖書の中でここに始めて登場する天使ではありません。旧約聖書のダニエル書の中で、天使ガブリエルは、ダニエルが見た幻の意味をダニエルに語って聞かせた天使です。そして、ダニエルのその幻は、古代オリエントの世界を支配した世界帝国の勢力の盛衰が、最終的には全てのもの創造主である神の支配の下にあることを示す幻だったのです。ダニエルにこの世界の歴史を導く神の支配を語り聞かせた天使ガブリエルは、今、新たに神から遣わされて、ナザレの乙女マリアに隠されていた神のご計画の実現の時を告げているのです。

「おめでとう」と訳されているマリアへの天使の第一声は、「喜べ！」という意味の「おめでとう」です。何故天使が「喜べ！」と告げたかということ、ナザレの乙女マリアが、神がこの世界の歴史の中にもたらそうとしておられるクリスマスの最初の受領者となるからです。そしてそれは、全くの神の発意としての、神の恵みによることであるのです。その意味で、天使はマリアに、「あなたは神によって恵みを受けた」と告げているのです。クリスマスの夜、マリアから生まれることになっている子に「イエスと名づけなさい」と天使は告げます。「主は救い、主は救われる」というその名は、抽象的に主の救いを意味しているわけではありません。それは、この世界の中で旧約のイスラエルの民をここまで導いてきた神の御計画の中に目指されていた、神の救いを告げているのです。

クリスマスを祝うということは、私たちもナザレの乙女マリアのように、神によるクリスマスの恵みの受領者となるということです。クリスマスの恵みの受領とは、「神は救われる」というマリアから生まれる子がもたらす、神の約束の受領を意味しています。それこそがこの時代を生きる私たちに残された救いの希望となるのは、私たちを取り巻くこの世界が、私たちに約束していたものをことごとく裏切る現実を、今、私たちのこの目で見ているからです。

ダニエルが見た幻は、この世界に平和と繁栄を実現しようとした古代オリエンの諸帝国の没落と滅亡を告げる幻だったのです。この世界に平和と繁栄をもたらすために、これらの帝国が目指した世界の統一は、度重なる悲惨な戦争に世界を巻き込み、その支配下に生きた人々に搾取と隷属しかもたらさなかったのです。旧約の時代を生きたイスラエルの民の歴史は、そのような暴力と欺瞞に満ちたこの世の支配のもとに生きた人々の苦難の歴史を語っています。そしてそれは、今の時代の私たちの歴史とも無縁ではありません。

しかし、ダニエルが見た幻は、そのような世界の現実の中に隠されている、神の御計画を予告していたのです。その幻の意味をダニエルの解き明かした天使ガブリエルが、ナザレのおとめマリアに告げたことこそが、このような歴史を導かれる神の御計画が目指していたことであつたのです。

「ご覧ください、ここに、あなたのはしためがおります。御心のままにこのはしためをお使いになってください。」ナザレのおとめマリアは、この世界の歴史を導く神の御計画に全身全霊をもって応えることによって、この世界に神の御計画を実現する栄誉を受けて、救い主の母とされました。

けれども、その聖母の栄誉は、この世界の中では隠されままであつたのです。こうして聖母マリアは、ローマ皇帝の勅令によって実施された人口調査のあおりを受けて、ベツレヘムの馬屋でイエスの母とされたのです。

聖母マリアが天使のお告げを通して受領されたクリスマスがそこにあります。そして、私たちが祝うクリスマスもいつもそこに戻らなければならないのです。この時代を生きる私たちは、そこに戻って、この時代に神が私たちに求めておられるクリスマスを迎えたいと思います。神のみが与えることの出来る希望の光に信頼して、このクリスマスを祝いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高